

芦屋の美術、もうひとつの起点 —伊藤継郎

川原百合恵



1



2



3

図1：伊藤継郎《二人の司教》
1968年 油彩、布 当館蔵
第23回新制作協会展

図2：伊藤アトリエにて、1950年頃。
下から伊藤、白髪一雄、最上に村上
三郎。

図3：第3回芦屋市展審査風景、1950年。
着席の人物左から伊藤、吉原治良。
作品は小出泰弘。

当館は 1991 年の開館以来初となる改修工事を終え、この春、2023 年 4 月 15 日にリニューアルオープンします。この機会に、芦屋の地で描き続けた画家、伊藤継郎（いとうつぐろう 1907-1994 年）の展覧会を開催します。

伊藤は大日本紡績会社重役であった伊藤桑太郎の次男として、大阪に生まれました。病気がちな青年期を過ごす中、1923 年松原三五郎主宰の天彩画塾、翌年赤松麟作主宰の赤松洋画塾にて学びます。1928 年に療養を兼ねて芦屋へ転居、終生この地で暮らしました。

1930 年代には二科会をはじめ複数の美術団体展に出品して研鑽を積みます。1941 年に小磯良平や猪熊弦一郎らの誘いで新制作派協会（1951 年に新制作協会と改称）へ入会。新制作派協会は、国家が美術界を統制しようとした 1935 年の帝展改組に端を発し、純粋な芸術上の探求のみを求めた精鋭たちの集団で、当時の美術界に清新な風をもたらしていました。以降、伊藤はこの会を発表の拠点と定め、独自の画風を展開していきます。

伊藤は、日常の一場面や人物、動物、旅先の風景や異国のの人々など、自らが心惹かれたモチーフを愛情豊かに描きました。絵具を扱う独自の技法による、質感豊かな絵肌が特徴です。当館では開館以来、郷土の画家として伊藤の調査・研究を重ね、現在、作品 64 点および多数の関係資料を収蔵しています。

しかしなぜ、このたびのリニューアルオープンの展覧会に、伊藤継郎なのでしょう。

芦屋に築いた洋館のアトリエにて数々の裸婦像の傑作を生み出した近代洋画の巨匠・小出楯重。今や世界的に評価の高い前衛美術集団「具体美術協会（具体）」のリーダー・吉原治良。芦屋の美術を語るとき、いくつかの重要な「起点」となる人物がいます。

実は伊藤継郎も彼らと同様に、芦屋の美術における「起点」というべき存在なのです。

戦後、幸いにも戦災を免れた伊藤のアトリエは、小磯良平や田村孝之介、小松益喜、西村元三朗、上村松篁などの画家、竹中郁や妹尾河童らの文化人まで、多彩な人物が集う場所であり

ました。デッサン会や制作会が開かれ、とくに戦災で住居とアトリエを失った小磯と田村は、仮住まいの身では難しい裸婦の制作の場をここに求めました。

また、新制作派協会の研究所も 1951 年頃まで伊藤のアトリエ内に置かれ、村上三郎と白髪一雄という後の「具体」主力メンバー 2 人が通い、出会っています。同時にアトリエでは絵画教室（伊藤洋画研究所）も開かれ、大人から子どもまで多くの人々が学びました。

一方、伊藤は 1948 年の芦屋市美術協会の結成に参加します。戦後の復興を文化の力で担うべく、芦屋市のとりまとめのもと（特に芦屋市職員・熊田種次の奔走によって）、吉原治良、山崎隆夫、福田眉仙、写真家の中山岩太やハナヤ勘兵衛ら、当時第一線で活躍していた芦屋市在住の芸術家たちが一堂に会したのが本協会です。芦屋市展や童美展の開催、写生大会や絵画の講習会など、活発な活動を通して芦屋の文化の発展に貢献しました。伊藤も芦屋市展や童美展の審査員を務め、2 代目会長の吉原（初代は芦屋市長）が逝去した 1972 年からは代表を務めました。

このように、自身の制作活動の傍ら、同時代の画家たちや市民といった多くの「描く人」から慕われ、彼らの豊かな創作活動の起点となった伊藤継郎。

当館は 1991 年の開館の年、伊藤の回顧展「伊藤継郎展 画業 60 余年の歩み」を開催しました。伊藤の生前に公立美術館で開催された唯一の個展です。本展はこの回顧展以来 32 年ぶり、没後としては初の大規模な伊藤継郎展となります。伊藤が交流した 20 名の多彩な画家たちの作品とともに、伊藤作品約 60 点を展示します。同時代の洋画界の様相を背景に、伊藤の足跡を追い、関西の洋画史において伊藤が果たした役割を改めて探ります。併せて、伊藤絵画の内実に「モチーフ」「技法」という制作上の観点から迫ります。

芦屋の地に生きた、ひとりの画家—伊藤継郎。その素顔と魅力的な作品たちに、ぜひ会いにきてください。

（かわはらゆりえ 芦屋市立美術博物館学芸員）